島本町文化財調査報告書

第 7 集

山崎地区遺跡範囲確認調査報告

平成 17 年 3 月

島本町教育委員会

序　　文

本町は大阪府の北東部に位置しています。古代から水・陸の交通の要衝として栄え、近年では京都・大阪のベットタウンとして発展してまいりました。その発展の一方で残された文化遺産が消えていくのも事実であります。

先人達の残してきた数多くの文化財を後世に正しく伝えることは、現代を生きる私たちの責務であります。平成19年春のＪＲ新駅の開業に伴い、島本町の将来の窓口が開けることになりますが、これと共に郷土の歴史・文化・自然を生かした心豊かなまちづくりに、努めてまいらねばならないと考えております。

本書は、周知の遺跡として登録しております東大寺瓦窯跡（鈴谷瓦窯跡）の詳細を把握することを目的に、国庫補助金事業として実施した遺跡範囲確認調査の成果を報告するものです。

調査にあたりまして、多大なご指導・ご協力を賜りました大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関の皆様に深く感謝し、お礼申しあげますとともに、本町の今後の文化財行政に対し、変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成17年３月

島本町教育委員会
教育長　日高　久和

例　　言

1．本書は、大阪府三島郡島本町山崎四丁目地先に所在する鈴谷瓦窯跡および山崎西遺跡の範囲確認調査報告書である。

2．調査は、平成16年度国庫補助金事業（総額3,000,000円、国庫補助率50%、町負担率50%）として、大阪府教育委員事務局文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会事務局社会教育課が行い、平成16年４月１日に着手し、平成17年３月31日に本書の刊行を以って完了した。

3．調査は、以下の体制で実施した。

［事　務　局］　島本町教育委員会事務局社会教育課

［文化財指導員］　松尾洋次郎

［調　査　員］　久保直子、坂根　瞬

［調査補助員］　吉村光子、村山清己

4．調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会事務局文化財保護課のご指導を得たほか、本町都市整備課をはじめ多くの関係者各位からご協力を賜った。記して謝意を表したい。

5．本書の作成・編集は、松尾が主に行い、久保・坂根・吉村がそれを補佐した。

6．本書の執筆は、松尾と久保が行い、それぞれの文責を目次に記した。

7．本調査に係わる写真・実測図面などの記録類は、島本町教育委員会において保管しており、広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．本書で示す標高は、東京湾平均海水面（T.P.）からの＋値である。

2．本書の平面図などで示す方位は、国土座標第Ⅵ系における座北である。また、座標値は、世界測地系で記した。

3．土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版　通商産業省農林水産技術会議事務局監修・財団法人　日本色彩研究色票監修を使用した。なお、その記載順序は、「色名－記号－土質名」とした。

4．本調査では、トレンチの呼称を「遺跡名－調査年度－調査次数－トレンチ名」とした。

5．本調査では、「ＳＫ」や「ＳＤ」などの遺構記号を用いず、「土坑」や「溝」などと表記した。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
第１章　はじめに
　第１節　島本町の地理及び歴史の概要 ---------- （久　保）1
　第２節　平成16年度埋蔵文化財調査の概要 ---------- （松　尾）3
第２章　調査に至る経緯と調査方法 ---------- （松　尾）4
第３章　調査の成果 ---------- （松　尾）4
　第１節　基本層序 ---------- 7
　第２節　山崎西遺跡他04－１ ---------- 7
　第３節　鈴谷瓦窯跡04－１ ---------- 8
　第４節　鈴谷瓦窯跡04－２ ---------- 11
第４章　まとめ ---------- （松　尾）11

挿図表目次

第１図　鈴谷瓦窯跡を示す石碑と道標 ---------- 1
第２図　山崎地区周辺の遺跡分布 ---------- 2
第３図　山崎西遺跡他04－１・鈴谷瓦窯跡04－１・２　トレンチ配置 ---------- 5
第４図　山崎西遺跡他04－１・鈴谷瓦窯跡04－１・２　トレンチ平面 ---------- 6
第５図　鈴谷瓦窯跡　既往調査資料 ---------- 7
第６図　山崎西遺跡他04－１・鈴谷瓦窯跡04－１・２　基本層序 ---------- 8
第７図　山崎西遺跡他04－１－１トレンチ　平面・断面 ---------- 9
第８図　鈴谷瓦窯跡04－１－１・２トレンチ　平面・断面 ---------- 10
第９図　鈴谷瓦窯跡04－２－1A・1Bトレンチ　平面・断面 ---------- 12
第10図　山崎西遺跡他04－１・鈴谷瓦窯跡04－１・２　出土遺物 ---------- 13

第１表　平成16年度　埋蔵文化財発掘調査の届出・通知　工事内容内訳 ---------- 3
第２表　山崎西遺跡他04－１・鈴谷瓦窯跡04－１・２　出土遺物観察表 ---------- 14

図版目次

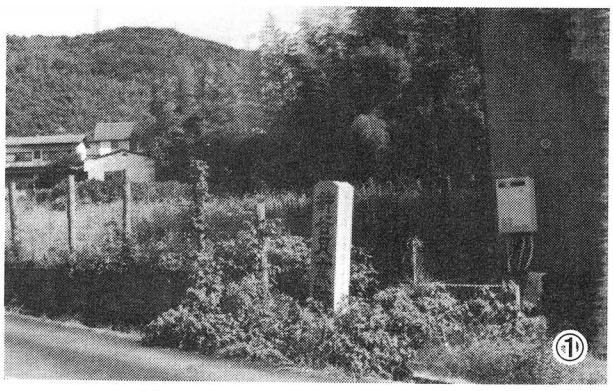
図版１　山崎西遺跡他04－１
図版２　鈴谷瓦窯跡04－１　（１）
図版３　鈴谷瓦窯跡04－１　（２）
図版４　鈴谷瓦窯跡04－２
図版５　山崎西遺跡他04－１・鈴谷瓦窯跡04－１・２　出土遺物

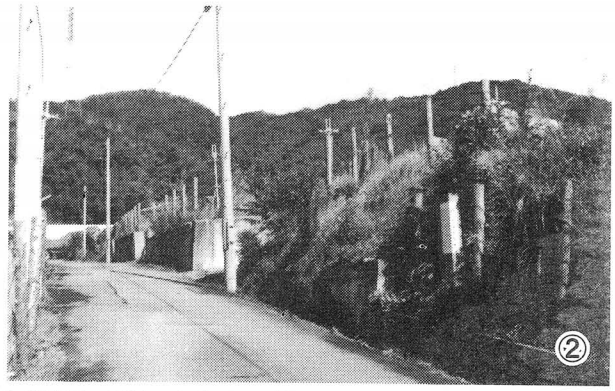
第1章 はじめに

第１節　島本町の地理及び歴史の概要

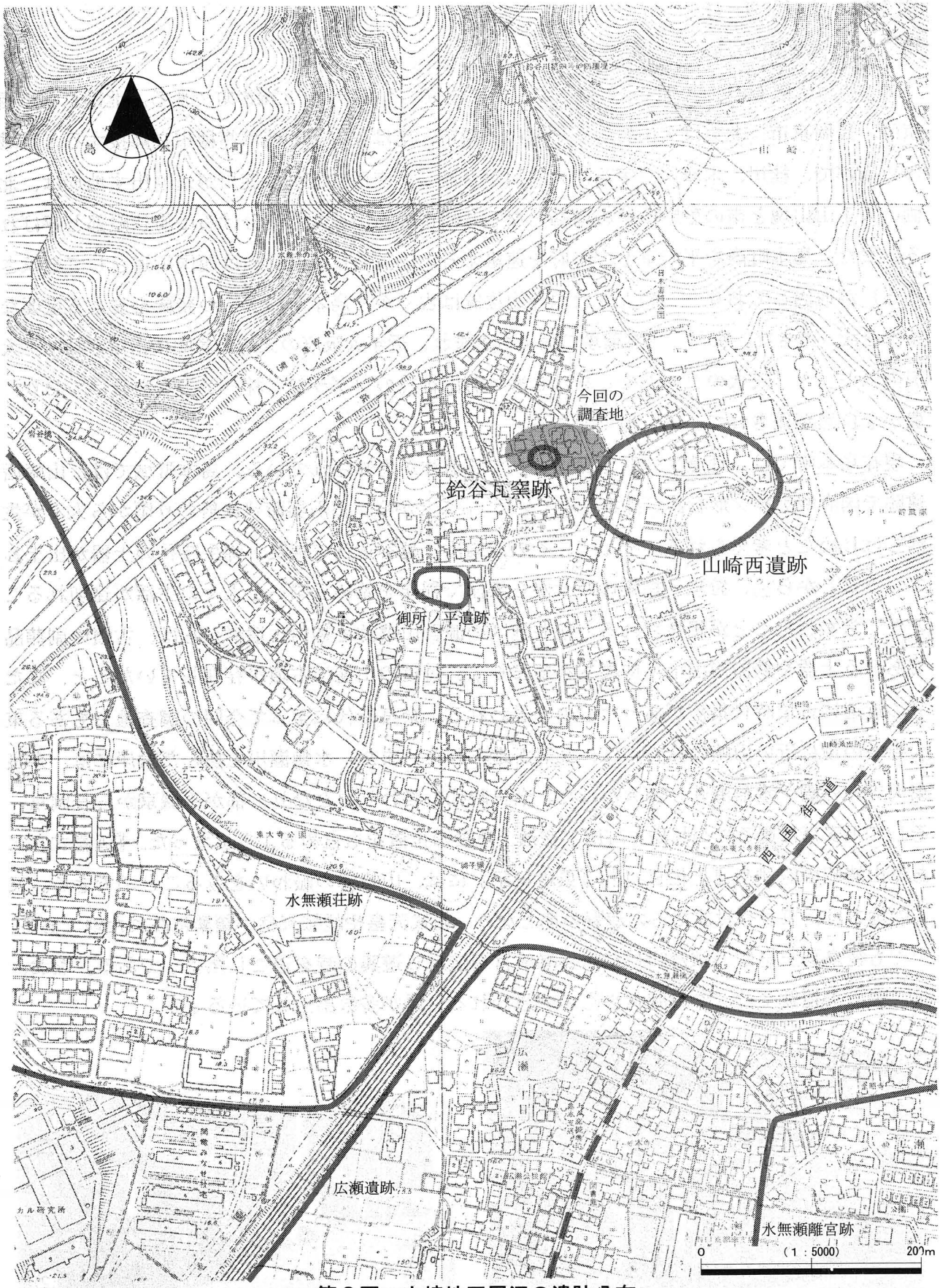
島本町は大阪府の北東端、京都府との府境に位置する面積16.78㎢の町である。北は京都市西京区、長岡京市、北東は大山崎町、東南は八幡市、南は枚方市、西は高槻市に隣接する。町域の東南部で、桂川、木津川、宇治川の三川が合流して南西に流れる淀川が造り出す地形は、北側の天王山山塊と南の生駒山地の南端となる八幡市の男山丘陵とを分ける山崎狭隘部と呼ばれる。また、島本町内を平安京と大宰府を連絡する山陽道（江戸時代には西国街道として継承される）が通過しており、このような地理的位置は古くから島本町の歴史の発展を支える重要な条件となってきた。また、自然環境の面にも恵まれ、近年大阪府の天然記念物に指定された「大沢のスギ」と「尺代のヤマモモ」をはじめ「若山神社のツブラジイ林」が指定を受けており、豊かな自然が残されている土地でもある。

現在島本町では、埋蔵文化財包蔵地として17遺跡が周知されている。島本町域では、山崎西遺跡で国府型ナイフ形石器が採集されている[1]ことから、旧石器時代の終わり頃から人々が生活しはじめたと考えられる。そして、その活動は、越谷遺跡で縄文・弥生時代の土器が出土していることから[2]、狩猟・採集の時代から集団で稲作を始める頃へと人々の生活が途切れることなく営まれたことが想像される。桜井地区の源吾山遺跡と神内古墳群からは、古墳の副葬品であろう土器や鉄器が出土・採集されており[3]、付近の山麓に古墳が存在していたこと、またその近辺に古墳時代集落があったものと思われる。奈良時代に至って今回の調査地でもある東大寺との境に近い山崎の鈴谷には、瓦窯が造られた。また、水無瀬川を挟んだ対岸には、奈良東大寺の荘園「水無瀬荘」が置かれた。奈良時代も終わり頃となり、都が平城京から長岡京、そして平安京に遷るにつれ島本町は、交通上重要な位置をも占めるようになった。『延喜式』にある山崎駅の記述や『土佐日記』・『更級日記』には、山崎津の賑わいをみることができる。又この地方は、天皇や貴族たちの遊覧の地となり、桓武天皇や嵯峨天皇が頻繁に訪れた地である。中でも後鳥羽上皇は、鎌倉時代に水無瀬離宮を造営し遊興の時を過ごしたようである。なお、近くの広瀬遺跡では、この時代のものと思われる土器が多数出土している[4]。





第１図　鈴谷瓦窯跡を示す石碑（①）と道標（②）（番号は第３図に対応）



第２図　山崎地区周辺の遺跡分布

註>

1）島本町史編さん委員会　編　1975　「第二章　第一節　最初のあしあと」『島本町史　本文編』

2）名神高速道路内遺跡調査会　1997　『越谷遺跡他発掘調査報告書』「名神高速道路内遺跡調査会調査報告書」第２輯

3）a．島本町史編さん委員会　編　1975　「第二章　第三節　古墳時代」『島本町史　本文編』

b．前掲註２）

4）島本町教育委員会　1991　『島本町埋蔵文化財調査報告書』第１集

第２節　平成16年度埋蔵文化財調査の概要

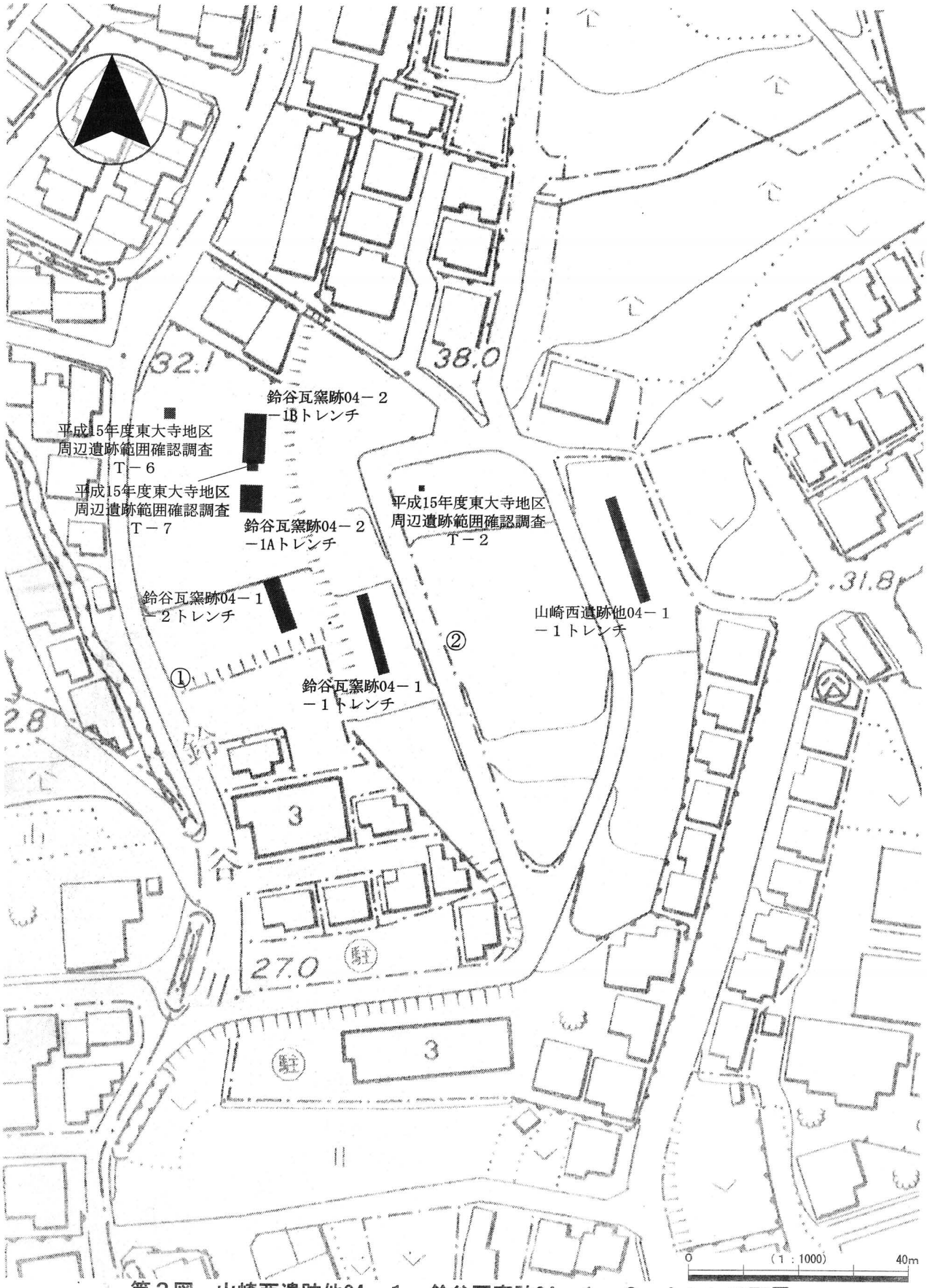
ここでは、島本町内で平成16年度に実施した埋蔵文化財調査について、その概要を述べたい。平成16年度の「埋蔵文化財発掘の届出・通知」受付件数は、平成17年２月28日時点で34件である。この届出・通知にかかる工事内容は、下表の内訳（第１表）のとおりである。そして、これらに対する指導事項は、開発事業に伴う確認調査１件、工事立会28件、慎重工事５件である。なお、埋蔵文化財包蔵地外での開発事業に伴う試掘調査は、２件である。

第１表　平成16年度　埋蔵文化財発掘調査の届出・通知　工事内容内訳

道路	１件	鉄道	０件	空港	０件	河川	０件
港湾	０件	ダム	０件	学校	０件	宅地造成	０件
個人住宅	14 件	分譲住宅	18 件	共同住宅	１件	兼用住宅	０件
その他住宅	１件	工場	０件	店舗	０件	土地区画整理	０件
公園造成	０件	ゴルフ場	０件	観光開発	０件	ガス	０件
電気	０件	水道	０件	下水道	０件	電話通信	０件
農業基盤	０件	農業開発	０件	土砂採取	０件	その他開発	０件

うえのとおり島本町教育委員会における埋蔵文化財調査は、個人住宅と分譲住宅に伴う工事立会がその大半を占め、基礎杭打設工事の事前調査のために個々の調査面積も極めて狭いものであった。調査の対象となった遺跡は、包蔵地としての範囲が広いこともあって広瀬遺跡が19件と一番多く、次いで水無瀬荘跡が６件、山崎東遺跡が４件、桜井御所跡と源吾山遺跡が各２件、桜井駅跡が１件、である。

平成16年度の埋蔵文化財調査で特筆すべきは、ＪＲ新駅の開業に伴う桜井駅跡の確認調査において中世期の遺構面および遺構・遺物を確認したことである。桜井駅跡についてこれまでその実態・全容が実証されることがなかっただけにこの成果は、貴重なものである。次に、工事立会では、各申請地点において掘削を行ったところ、数少ない件数ながらも確認深度内で遺構または遺物包含層を確認したが、大半が層厚1.0m以上の現代造成土層を確認したに留まるものであった。ここでは、それら数少ないものの成果概要を紹介しておく。まず、広瀬遺跡内の広瀬三丁目５号地内で計５箇所にトレンチを設定した立会では、現況面を形成する造成土層を除去すると、現況面から－0.8～－0.9mの深度で遺物包含層を確認した。ここでは、遺物包含層に影響しない範囲での工事が予定されていたため、慎重に工事をすすめるようにと要請し、発掘



第３図　山崎西遺跡他04－１・鈴谷瓦窯跡04－１・２　トレンチ配置

調査を行わなかった。しかし、これら申請地北西隣の既往立会では、造成土層を除去した下で同様に遺物包含層が確認されており、この周辺での工事に対して注意した立会が必要であろう。なお、広瀬遺跡内における他の申請地では、一部で現代造成土層を除去した下で近世期まで溯る可能性がある耕作土層を確認したが、大半がさらに深い深度に遺構面や遺物包含層が存在すると推測する。ただし、工事立会では、いずれも立会面積が狭小のために安全面で現代造成土層を除去し下層の状況を確認できるほどの掘削深度を確保することができなかった。

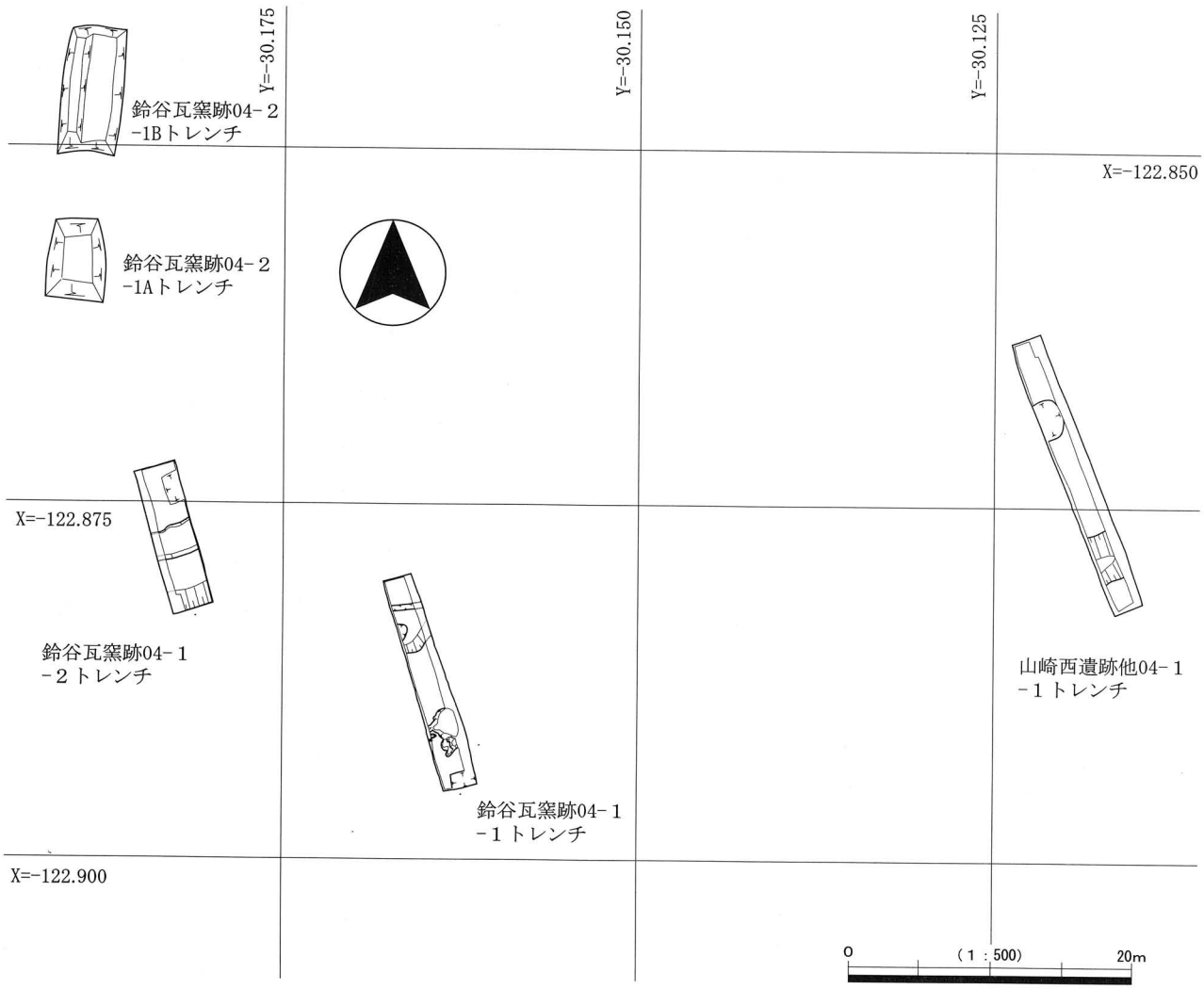
島本町における平成16年度の埋蔵文化財調査概要は、以上のとおりである。これら申請地点では、立会・確認調査の結果、顕著な遺構や遺物包含層などを確認したのはわずかであった。しかしながら、これら成果については、立会・確認調査での調査面積がわずかであることもあり、遺構や遺物包含層を確認した申請地点はもちろん、確認できなかった申請地点およびその付近においても注意が必要であろう。埋蔵文化財包蔵地内・外での立会・確認調査は、島本町内の埋蔵文化財を考える上での基礎資料となるものであり、かつ島本町内の貴重な文化財を保護していく上でも重要なものである。しかし、こうした調査をはじめとする文化財保護活動は、各申請者や町民方の理解・協力のもとに成り立つので、今後ともそうした助力を求めながらこれに努めていきたい。

第２章　調査に至る経緯と調査方法

この調査は、平成13年度から国庫補助金事業として島本町内で周知される埋蔵文化財包蔵地範囲内・外で遺構・遺物の有無などを確認するために行っているものであり、今回がその４年目にあたる。今回の調査は、山崎西遺跡の北西隣部と鈴谷瓦窯跡の遺跡包蔵地にあたる山崎四丁目一帯で行い、前者の調査名を山崎西遺跡他04－１、後者を鈴谷瓦窯跡04－１・２として扱った。調査区は、幅２ｍ～４ｍ・延長５ｍ～20ｍの細長いトレンチを山崎西遺跡の北西隣部で１箇所、鈴谷瓦窯跡の包蔵地内で３箇所の計４箇所に設定した。調査方法は、現代表土層および造成土層を重機で掘削し、それより下層の堆積土を人力で一層ごとに掘削し、遺構面および遺構の検出や遺物採集に努めた。なお、調査の記録作業は、調査状況に応じてトレンチの平面（Ｓ＝１：40）・断面（Ｓ＝１：20）の図化や写真撮影を行った。

第３章　調査の成果

上記のように今回の調査は、山崎西遺跡と鈴谷瓦窯跡という２つの遺跡をまたぐ範囲で行った。これらは、前者が旧石器時代の遺物散布地として、後者が町営鈴谷住宅の建設に伴う造成時（昭和29年）に発見された奈良時代の瓦窯跡[1]として周知されている。しかしながら、これらについては、どちらの遺跡も既往の調査例が少なく、その実態が十分に把握されているとは



第４図　山崎西遺跡他04－１・鈴谷瓦窯跡04－１・２　トレンチ平面

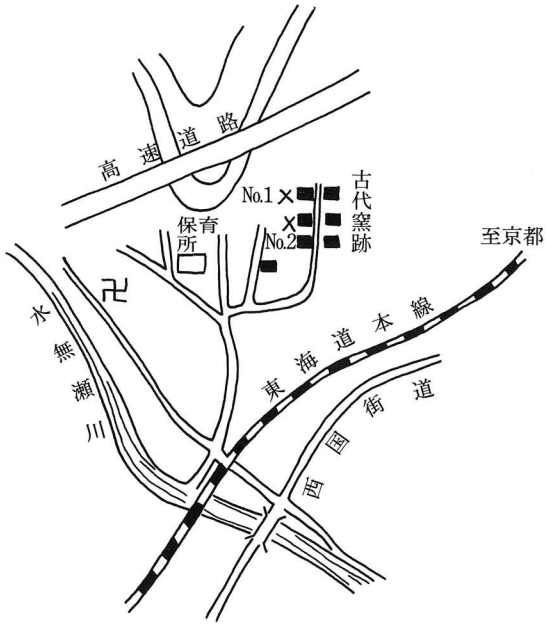
言い難い。

今回の調査は、天王山山地から名神高速道路をわたり東海道本線に向けて小規模な範囲に広がる北西から南東に下る丘陵地形を東西に切るような範囲で行った。なお、山崎丘陵と呼ばれるこの丘陵は、地質的には砂礫層とシルト層を主とした大阪層群下部ないしはこれを覆う砂礫を主とする中位（～低位）段丘堆積層に相当する。

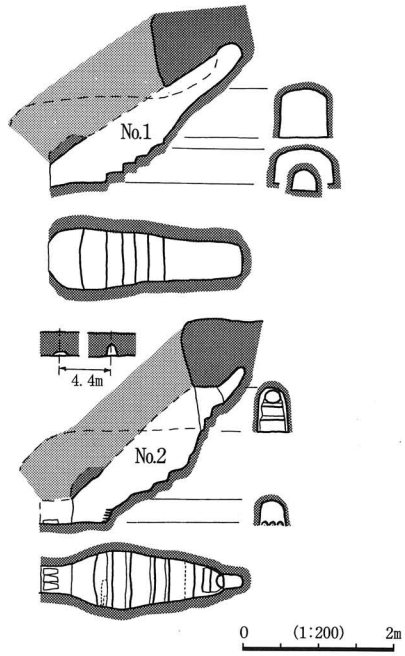
以下、調査の成果は、今回の調査範囲を通じた基本層序をまず提示し、次いで遺跡ごとに各トレンチの調査所見を述べていきたい。

註>

1）鈴谷瓦窯跡は、昭和29年の調査で２基が確認・調査されている。下記文献によれば、これらは、東から西に下る斜面を利用して造られた階段式登窯であったとある。しかし、文献ｄでは、この窯跡の存在が町営鈴谷住宅の造成以前（戦前）すでに近在の人々に周知され、且つ町営鈴谷住宅造成時に窯跡の破壊をくい止める運動があったとのことで、島本町史の内容に一部訂正を要することが



註１）文献ｂ（p.10～11）図を再トレース・一部改変



註１）文献ａ（p.304）図を再トレース・一部改変

第５図　鈴谷瓦窯跡　既往調査資料

指摘されている。

ａ．藤沢一夫　1967　「造瓦技術の進展」『日本の考古学』Ⅵ　河出書房

ｂ．井上栄光　編　1967　『島本あれこれ』

ｃ．島本町史編さん委員会　編　1975　「第三章　第二節　律令制下の島本」『島本町史　本文編』

ｄ．奥村寛純　1987　「鈴谷瓦窯跡は早くから地元で知られていた」『水無瀬野』Vol.Ⅱ－№.４　郷土島本研究会

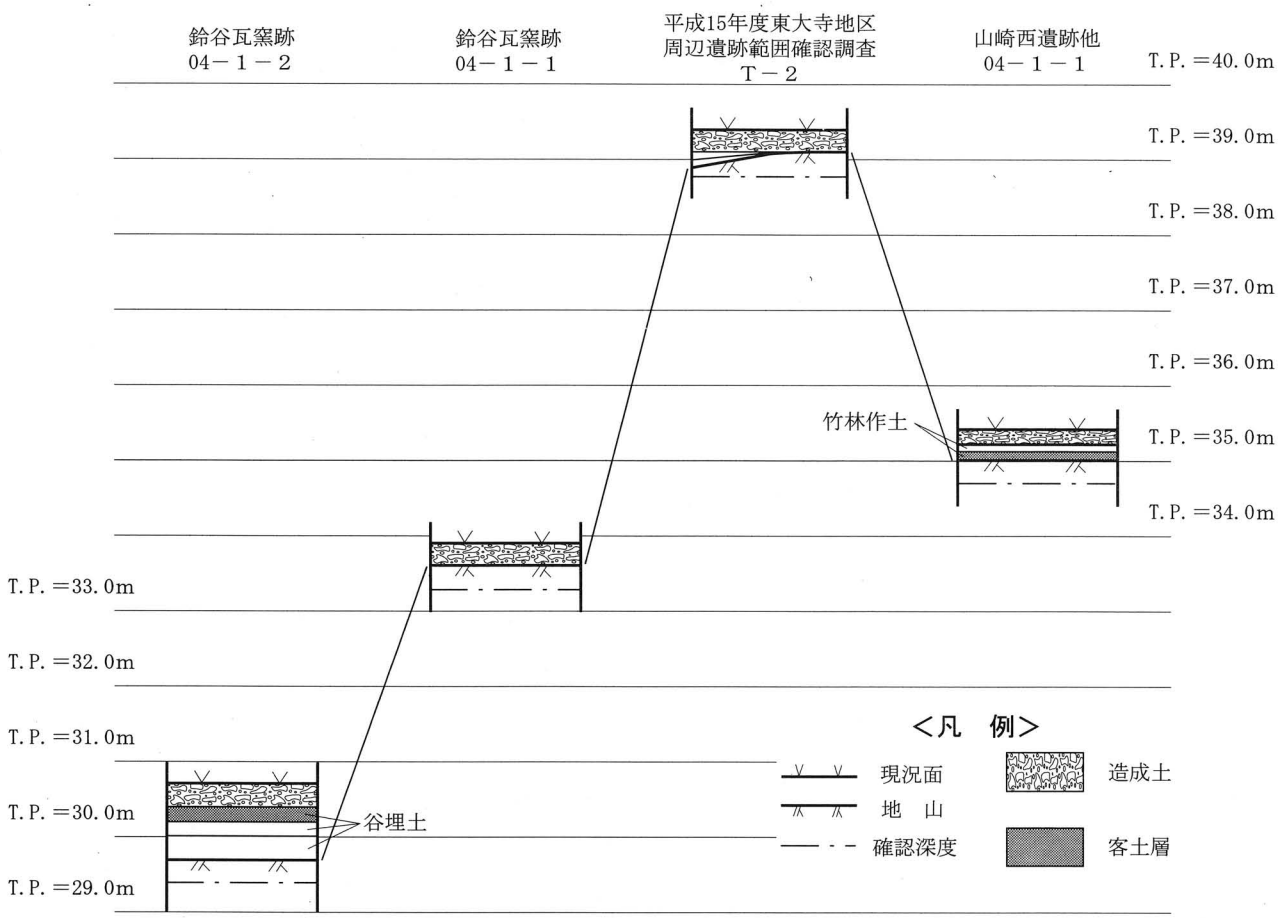
第１節　基本層序

まず、鈴谷瓦窯跡04－１－１トレンチと山崎西遺跡他04－１－１トレンチでは、後者で竹林作土層を挟在させるが、現代造成土層の下で地山層が確認できる。一方、鈴谷瓦窯跡04－１－２トレンチと鈴谷瓦窯跡04－２－1A・1Bトレンチは、トレンチが北から南に向かって下る谷筋（鈴谷？）上にあたっており、調査の結果、現代表土層より下でこの谷状地形を埋没させた数枚のシルト～砂礫層が確認でき、これらを除去した下で地山層を確認した。

第２節　山崎西遺跡他04－１

山崎西遺跡他04－１－１トレンチ

第１トレンチでは、町営鈴谷住宅の解体時に発生したのであろう造成土（第１層）を除去した下で、竹林作土（第２層）とその上面で第１面を確認した。この第１面では、町営鈴谷住宅に伴う浄化槽であろう大型の土坑1基のほかにこれより時期を溯る遺構を確認できなかった。第２層は、竹根の成育に伴って攪拌され土壌化が進んだ上部層（第2a層）と竹根の影響をさほど受けていない下部層（第2b層）から成る。なお、トレンチの南半部でこの第２層の下部層であ



第６図　山崎西遺跡他04－１・鈴谷瓦窯跡04－１・２　基本層序

る第2b層を除去中には、層中から中世期の土師器皿片など（第10図１・６，図版５－２）が出土した。第10図１は、口縁部が体部から短く直に立ち上がる器形を成している。第10図６は、磁器の底部片である。そして、第２層を除去した下では、トレンチの南半部で浅く谷状に落ち込む第２面（地山面）を確認した。しかし、この面では、ほかに明確な人為的遺構を確認できなかった。

第３節　鈴谷瓦窯跡04－１

鈴谷瓦窯跡04－１－１トレンチ

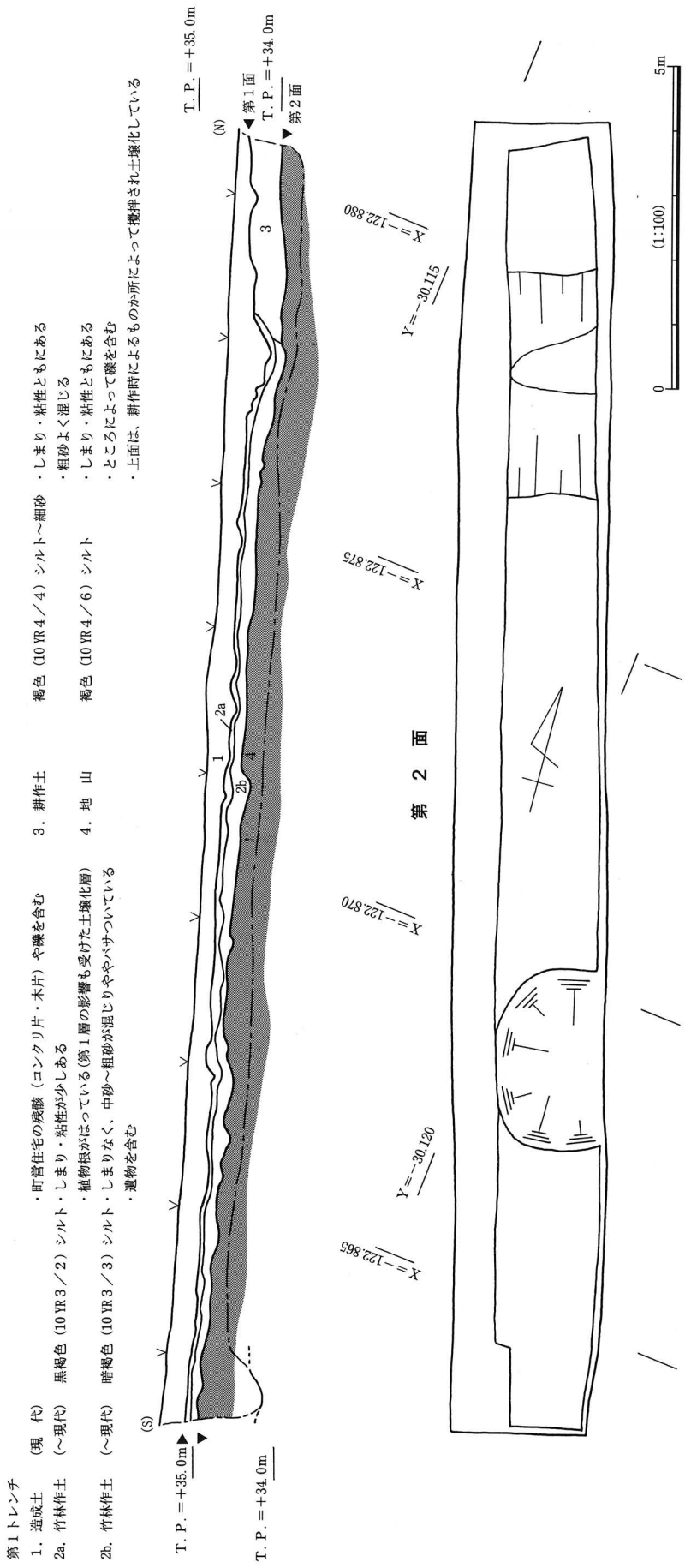
第１トレンチは、山崎西遺跡他04－１－１トレンチの第１層に相当しよう町営鈴谷住宅の解体時に発生したのであろう造成土（第２層）を除去した直下で、トレンチ北部でわずかに北に下る地山面（第１面）を確認した。この第１面では、町営鈴谷住宅に伴う浄化槽であろう大型の土坑３基とトレンチの北部で排水を意図したものであろう東西方向の溝１条を検出したが、これらより時期を溯る遺構をほかに確認できなかった。

鈴谷瓦窯跡04－１－２トレンチ

第２トレンチでは、層厚0.1mにも満たない現代表土層を除去すると、北東－南西方向の谷状

地形を検出した。この谷状地形の埋没過程は、断割を行い観察した断面状況から、礫や上部にかけて現代期の桟瓦や植木鉢を含む造成土層（第１層）と、これより下層のシルト～細砂堆積層、という大きく２つの堆積に分けることができる。造成土層を除去した下のシルト～細砂堆積層上面では、明確な遺構を確認できなかった。これらシルト～細砂堆積層の上部層にあたる黄褐色シルト層（第２層）は、除去時に層中から中世期の土師器極細片など（第10図３・９・10，図版５－４・５）が一定量含まれていた。しかし、この黄褐色シルト層より下層のシルト～細砂堆積層からは、遺物が確認できなかった。そして、これらシルト～細砂堆積層を除去した下では、谷状地形の底面（第５面）を確認した。なお、この谷状地形の底面では、トレンチ中央部付近で落ち肩がほぼ直角を成す落ち込みを確認した（図版３下段）。しかし、この急角を成す落ち肩が人為的に作出されたものか自然なものかは、遺物等の出土もなく、判断するに至らなかった。

出土遺物については、形態などの判別がつくものを選別し図化・掲載した。まず、第10図３は、羽



第７図　山崎西遺跡 04 －１－１トレンチ　平面・断面

第１トレンチ

1．撹乱坑埋土　（現代）　オリーブ褐色（2.5Y４／３）シルト～細砂
・町営住宅解体時の産廃がまじる
・植物根が入り込んでいる

2．造成土　（現代）
・粘性ないが、しまりがある
・地山土のブロックがまじる
・町営住宅解体時の産廃がまじる

3．造成土　（現代）　オリーブ褐色（2.5Y４／３）シルト
・粘性ないが、しまりがある
・粗砂～小礫がまじる
・上部にかけて地山土の小ブロックがまじる

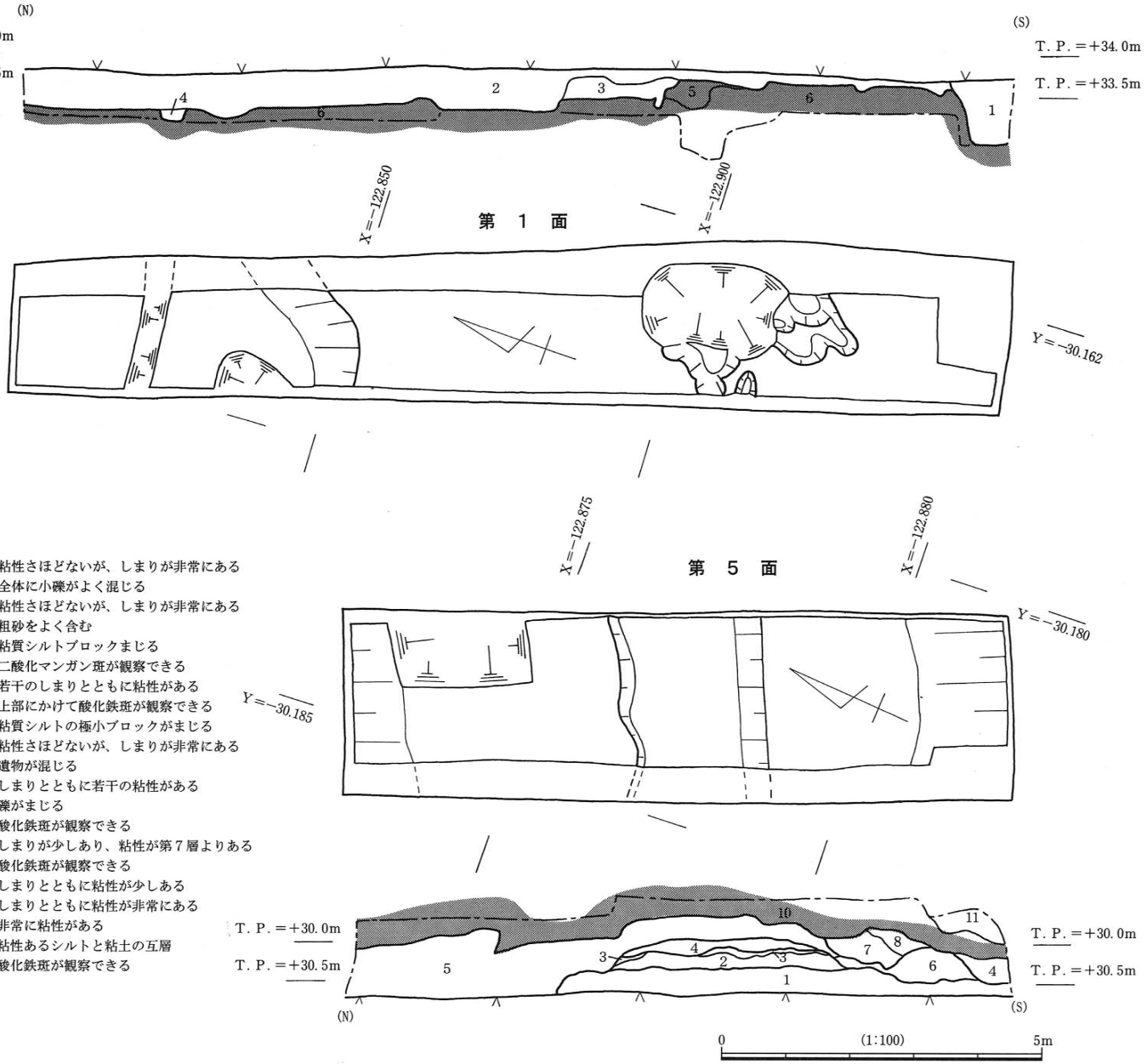
4．溝埋土　（現代）　黄褐色（2.5Y５／３）シルト
・しまりはさほどないが、粘性がある
・径～1.5cmほどの酸化鉄斑が観察できる

5．地　山　　褐色（10YR４／４）細砂～粗砂
・二酸化マンガンの集積が観察できる
・地山層に観察できるラミナ

6．地　山　　灰白色（5Y７／１）シルト
・しまりとともに粘性がある
・南方にかけて二酸化マンガンが集積する粗砂質ラミナが観察できる

第２トレンチ

1．造成土	（～現代）	黄褐色（2.5Y５／４）シルト	・粘性さほどないが、しまりが非常にある ・全体に小礫がよく混じる
2．谷埋土		黄褐色（2.5Y５／４）シルト	・粘性さほどないが、しまりが非常にある ・粗砂をよく含む
3．谷埋土		黄褐色（2.5Y５／３）細砂～中砂	・粘質シルトブロックまじる ・二酸化マンガン斑が観察できる
4．谷埋土		黄褐色（2.5Y５／４）シルト～細砂	・若干のしまりとともに粘性がある ・上部にかけて酸化鉄斑が観察できる
5．谷埋土		褐色（10YR４／４）粗砂	・粘質シルトの極小ブロックがまじる
6．溝埋土		オリーブ褐色（2.5Y４／３）シルト	・粘性さほどないが、しまりが非常にある ・遺物が混じる
7．谷埋土		灰黄色（2.5Y６／２）シルト	・しまりとともに若干の粘性がある ・礫がまじる ・酸化鉄斑が観察できる
8．谷埋土		黄褐色（2.5Y５／３）シルト	・しまりが少しあり、粘性が第７層よりある ・酸化鉄斑が観察できる
9．谷埋土		にぶい黄色（2.5Y６／３）シルト～小礫	・しまりとともに粘性が少しある
10．地　山		灰黄色（2.5Y６／２）シルト	・しまりとともに粘性が非常にある
11．地　山		灰黄色（2.5Y７／２）粘土	・非常に粘性がある ・粘性あるシルトと粘土の互層 ・酸化鉄斑が観察できる



第８図　鈴谷瓦窯跡04－１－１・２トレンチ　平面・断面

釜の鍔部片である。次に９は、土製の鋳型で、突起部を中心として幅３㎜ほどの溝が同心円に廻っている。10は、側面に不明瞭ながら擦痕が観察できる砥石である。

第４節　鈴谷瓦窯跡04－２

鈴谷瓦窯跡04－２－1Aトレンチ

第1Aトレンチは、現代表土より下で層厚２ｍにもおよぶ数枚の造成土層（第２～第７層）を確認した。これら層では、上面において明確な遺構を確認することができず、また採取が困難なほどの土師器小片を含んだ第３層を除いて層中から遺物も出土しなかった。なお、この第３層は、周辺に遺物包含層が存在していたことを示唆するものと考える。そして、これら造成土層を除去した下では、砂礫を主体とするグライ化の進んだ第８層とその上面で北から南へ緩やかに下る第２面を確認した。この第８層より下については、下層確認のために行った断割で砂礫堆積が２ｍ近く確認でき、その下で谷底面（第３面）を確認した。

鈴谷瓦窯跡04－２－1Bトレンチ

第1Bトレンチは、現代表土の下で第1Aトレンチの第２～第５層に対応しよう造成土層を確認した。これら造成土層のうち第５層上面は、西から東に向かって緩やかに下る斜面（第１面）を成していた。そして、これら造成土層を除去した下では、第10層とその上面で北から南に向かって下る斜面（第２面）を確認したが、明確な遺構を確認できなかった。第10層より下層は、下層確認のため行った断割でこの砂礫層がさらに１ｍ以上つづくのを確認した。そして、この断割によって第10層中では、上部の粘質シルト質部から奈良時代に溯ろう土師器や須恵器・布目（丸・平）瓦片（第10図２・４・５・７・８）が出土した。ただし、これら遺物は、大半が全体に摩滅していることから、原位置を保ったものでないと判断できる。

出土遺物は、形態などの判別がつくものを選別し図化・掲載した。２は、外面にハケを用いて器面調整が施されている土師器（甕？）胴部片である。４は、同心円文アテ具を内面に添えて外面から平行目タタキ具でもってタタキが施されている須恵器（甕？）胴部片である。５は、底部に高台が貼り付けられた須恵器（杯または壷・瓶）である。７と８は、凹面に布目を残す丸瓦（７）と平瓦（８）である。７に比べて焼成具合が硬質な８は、側縁部の面取りがしっかりと成されている。

第４章　ま　と　め

ここでは、今回の調査から得ることができた成果をまとめておきたい。

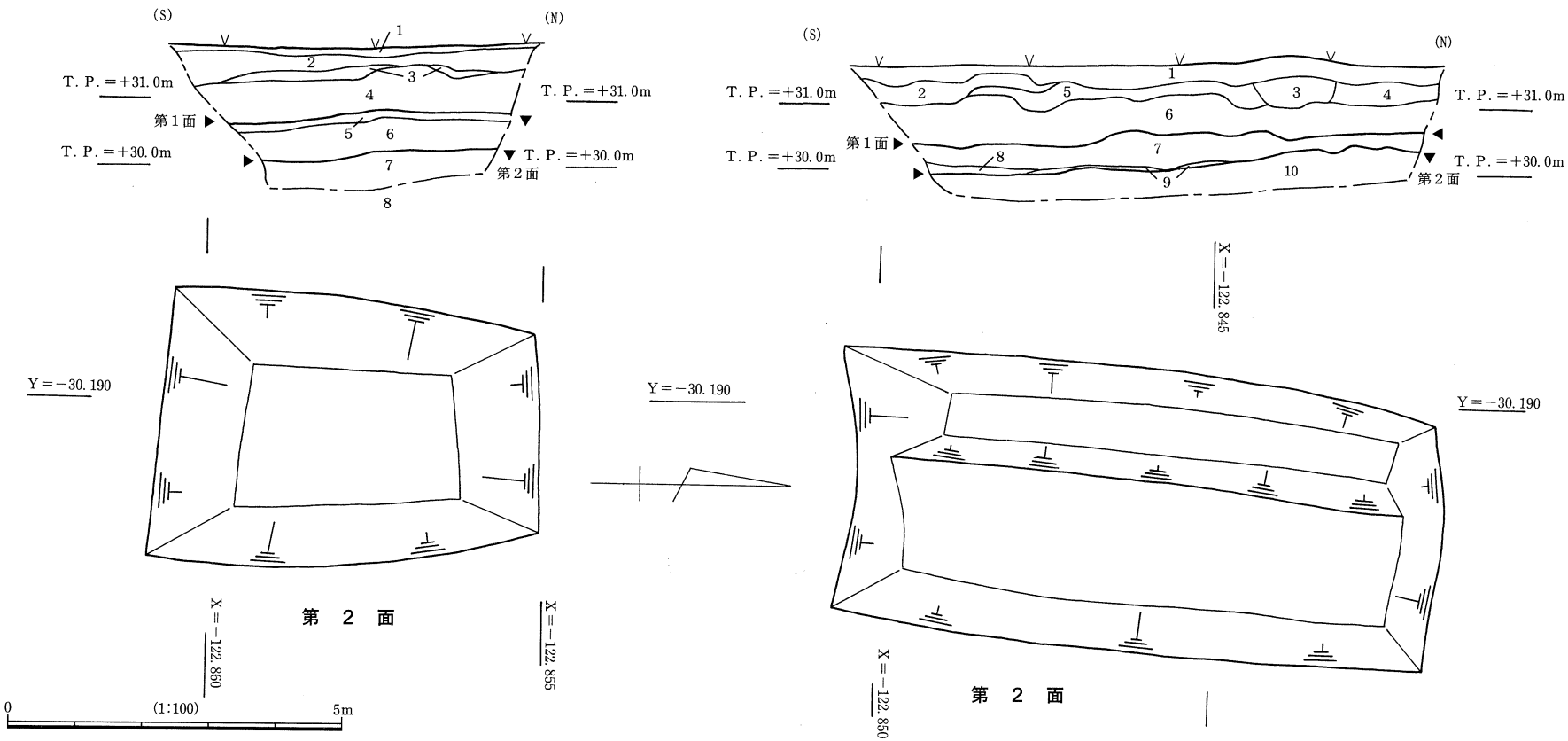
まず、山崎西遺跡他の第１トレンチでは、現代期以前の遺構を確認できなかったが、竹林作土層（第２層）中から中世期の土師器片などが出土した。これら遺物は、おそらく竹林造成時に近隣から持ち込まれた土（客土）中に混入した二次的なものであろう。しかし、これまで旧

第1Aトレンチ

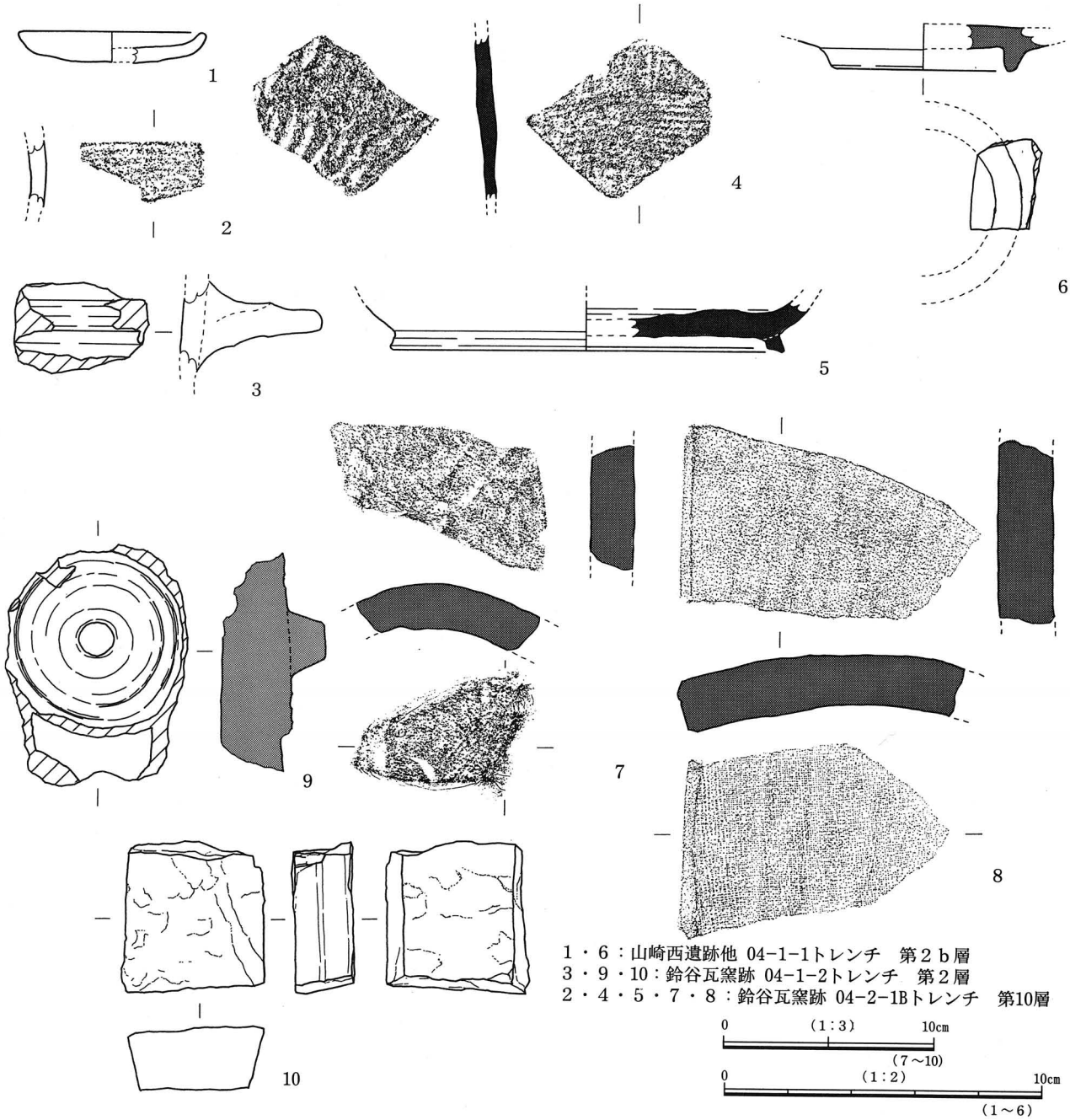
1．表　土	（現　代）	褐色（10YR４／４）シルト～細砂	・礫まじる
2．造成土	（～現代）	オリーブ黒色（５Y３／２）シルト～中砂	
3．造成土	（～現代）	にぶい褐色（10YR５／４）シルト	・しまり強く、粘性もある ・土師器極小片を含む
4．造成土	（～現代）	褐色（10YR４／４）細砂	・しまりなくサラサラだが、粘性が少しある （粘質シルトブロックまじる） ・上部にかけて小礫まじる
5．造成土	（～現代）	黄褐色（2.5Y５／３）シルト	・しまりなく木目細かく、第４層より粘性ある ・上部にかけて酸化鉄斑によって黄色味を帯びる
6．造成土	（～現代）	褐色（10YR４／４）細砂	・しまりないが、第４層より粘性つよい粘土ブロックまじる ・粗砂～小礫まじる
7．造成土	（～現代）	にぶい黄色（2.5Y６／３）シルト	・しまりさほどないが、粘性つよい ・層全体に酸化鉄斑がよく観察できる ・粗砂～小礫から成る水平ラミナが観察できる ・グライ化が進んでいる
8．谷埋土	（～近世）	暗オリーブ灰色（2.5GY４／１）粗砂～礫	・下層との層界付近に大礫まじる

第1Bトレンチ

1．表　土	（現　代）	褐色（10YR４／４）シルト～細砂	・礫まじる
2．造成土	（～現代）	黒褐色（2.5Y３／２）シルト～中砂	
3．造成土	（～現代）	にぶい褐色（10YR５／４）シルト	・粗砂～小礫まじる
4．造成土	（～現代）	褐色（10YR４／４）細砂～粗砂	
5．造成土	（～現代）	にぶい褐色（10YR５／４）シルト	・しまり強く、粘性もある・土師器極小片を含む
6．造成土	（～現代）	褐色（10YR４／４）細砂	・しまりなくサラサラだが、粘性が少しある （粘質シルトブロックまじる） ・上部にかけて小礫まじる
7．造成土	（～近世）	にぶい黄色（2.5Y６／３）シルト	・しまりあり、粘性とても強い ・粗砂～礫から成る水平ラミナが観察できる ・酸化鉄斑によって黄色味を帯びる
8．造成土	（～近世）	黒褐色（2.5Y３／２）シルト	・しまりと粘性は第７層と同程度 ・粗砂よくまじる ・土壌化が進んでいる
9．造成土	（～近世）	黄灰色（2.5Y４／１）シルト	・しまりと粘性は第７層ほどない ・中砂～粗砂まじる・土壌化は第８層ほど進んでない
10．谷埋土	（～近世）	暗オリーブ灰色（2.5GY４／１）粗砂～礫	・下層との層界付近に大礫まじる ・グライ化が進んで青灰色を帯びている



第９図　鈴谷瓦窯跡04－２－１A・１Bトレンチ　平面・断面



第10図　山崎西遺跡他04－１・鈴谷瓦窯跡04－１・２出土遺物

石器時代の散布地として周知されている山崎西遺跡については、その周辺に中世期の遺物包含層が存在する可能性が今回の成果から指摘できる。

次に、鈴谷瓦窯跡では、04－1－２トレンチと04－２－1A・1Bトレンチにおいて現代表土とその下の数枚の造成土層を除去した下で数枚のシルト～砂礫層の堆積を確認した。この砂礫層は、04－２－1A・1Bトレンチで断割を行い確認した堆積層の性質やトレンチの立地と合わせみて、(古)鈴谷（川）を埋没させたもの（谷埋土）と考えて相違ないだろう。なお、この谷埋土および地形は、断割を行い確認したところ最大（04－２－1Aトレンチ南端）で砂礫層の層厚が２ｍ近く

におよび、また、この層を除去した下で谷底を確認している。こうした成果から、04－１－２トレンチと04－２調査地一帯は、現在でも周辺より一段低い谷状地形を成しているが、且つてさらに深い谷が刻まれていたことが想像できる。ところで、今回の調査では、第1Bトレンチの第10層中から奈良時代に溯ろう土師器や須恵器・布目瓦片が出土している。これら出土遺物は、遺構に関係しない出土状況であったが、今回調査地点より北方ないし調査地を挟む左右丘陵上に瓦窯およびそれに関連する施設が存在した可能性を改めて示唆するものと考える。なお、これを追認するものとしては、中世期の土師器片などが一定量含まれていた04－１－２トレンチの第２層や04－２－1Aトレンチ第３層・04－２－1Bトレンチ第５層の存在が挙げられよう。つまりは、これらが谷地形を整地する際に盛られた土（客土）中に混入していたものであろうが、山崎西遺跡他の第１トレンチ第２層で同様のものが確認できることから、中世期の遺物包含層が近在する可能性を示唆しているものと考えるからである。

残念ながら今回は、鈴谷瓦窯跡が周知される契機となった昭和29年に行われた調査地の特定やその当時から推測されている新たな窯跡の確認に至らなかった。しかしながら今回の調査成果からは、鈴谷瓦窯が（旧）鈴谷を挟む丘陵斜面地（既往調査の成果からすると左丘陵斜面上）を利用し営まれ、且つその関連施設がこの谷を挟む左右丘陵上に存在していたものと改めて追認・想定できる。

第２表　山崎西遺跡他 04 －１・鈴谷瓦窯跡 04 －１・２出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出　土 遺　跡	出土 トレンチ	出土 層位	種　別	器　種	帰属 時期	法量（mm，g）				備　考
							口　径 最大長	器　高 最大幅	最大厚	重量	
第 10 図 1 図版 5－1	山崎西 遺跡他	第 1 トレンチ	第2b層	土師器	皿	中世	59	9	—	—	
図版 5－2	山崎西 遺跡他	第 1 トレンチ	第2b層	土師器	皿？	中世 ？	—	—	—	—	底部～体部 片？
第 10 図 2	鈴谷 瓦窯跡	第 1 B トレンチ	第10層	土師器	甕？	奈良 ？	20	39	5	—	外面にハケ 目
第 10 図 3 図版 5－3	鈴谷 瓦窯跡	第 2 トレンチ	第 2 層	土師器	羽　釜	中世	—	—	—	—	
第 10 図 4 図版 5－7	鈴谷 瓦窯跡	第 1 B トレンチ	第10層	須恵器	甕？	奈良 ？	50	68	5	—	外面：タタキ 内面：アテ
第 10 図 5 図版 5－8	鈴谷 瓦窯跡	第 1 B トレンチ	第10層	須恵器	杯 or 瓶	奈良 ？	(122)	16	7	—	
図版 5－4	鈴谷 瓦窯跡	第 2 トレンチ	第 2 層	瓦　質 土　器	？	中世	58	61	7	—	体部片・内 面にハケ目
図版 5－5	鈴谷 瓦窯跡	第 2 トレンチ	第 2 層	瓦　質 土　器	？	中世 ？	56	40	6	—	体部片
第 10 図 6 図版 5－6	山崎西 遺跡他	第 1 トレンチ	第2b層	磁　器	碗 or 皿	近世	(59)	(19)	—	—	
第 10 図 7 図版 5－9	鈴谷 瓦窯跡	第 1 B トレンチ	第10層	瓦	丸	奈良 ？	39	57	13	—	凹面に布目 ？
第 10 図 8 図版 5－10	鈴谷 瓦窯跡	第 1 B トレンチ	第10層	瓦	平	奈良	52	89	17	—	凹面に布目
第 10 図 9 図版 5－11	鈴谷 瓦窯跡	第 2 トレンチ	第 2 層	鋳　型	—	？	114	86	49	150	土製
第 10 図 10 図版 5－12	鈴谷 瓦窯跡	第 2 トレンチ	第 2 層	石　器	砥　石	？	72	67	30	260	

註＞法量欄の（　）数値は復元数値

図　　版

第1トレンチ　第2面（北から）

第1トレンチ　全景（北から）

図版2　鈴谷瓦窯跡04-1（1）

第1トレンチ　第1面（北から）

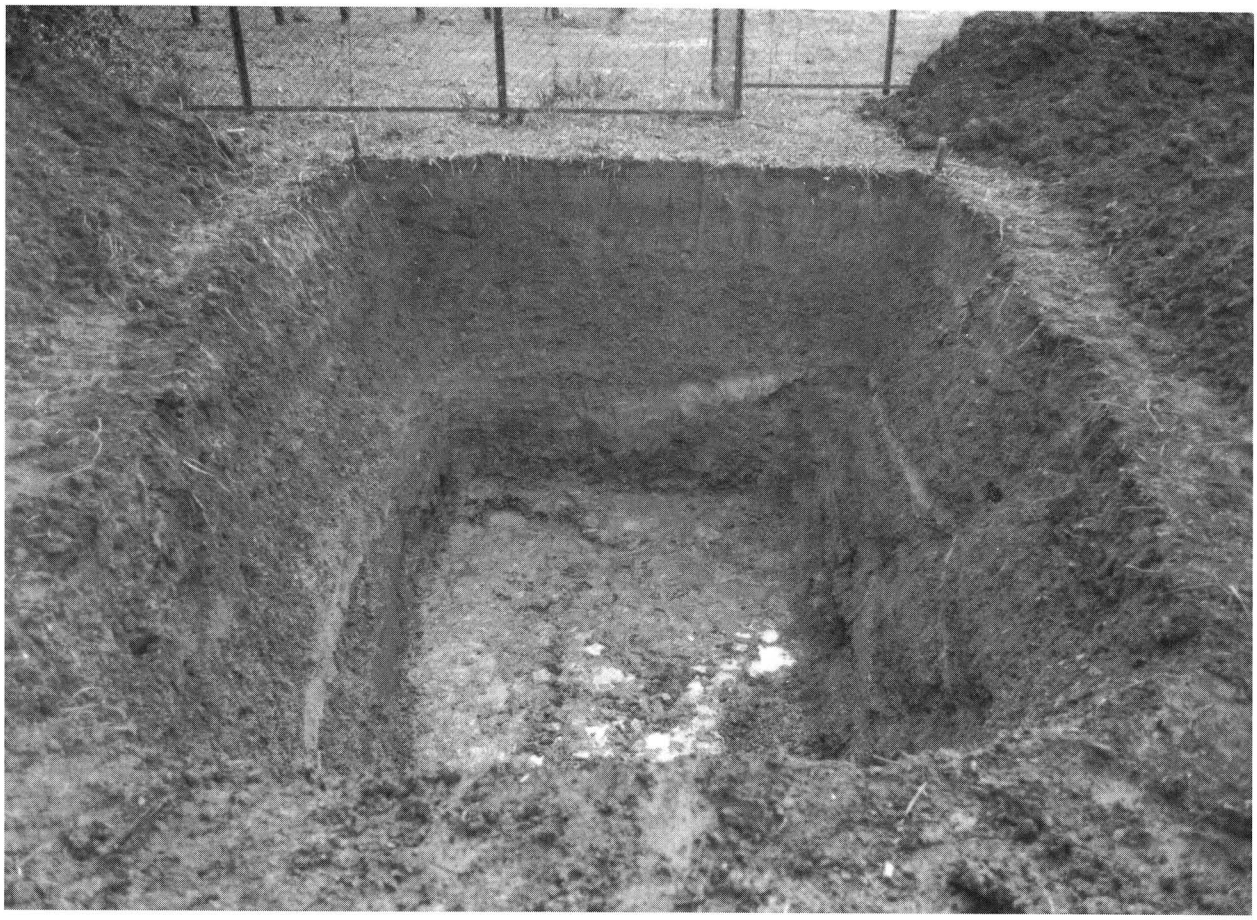
第1トレンチ　全景（北から）

図版3　鈴谷瓦窯跡04－1（2）

第２トレンチ　第５面（北から）

第２トレンチ　落ち込み（東から）

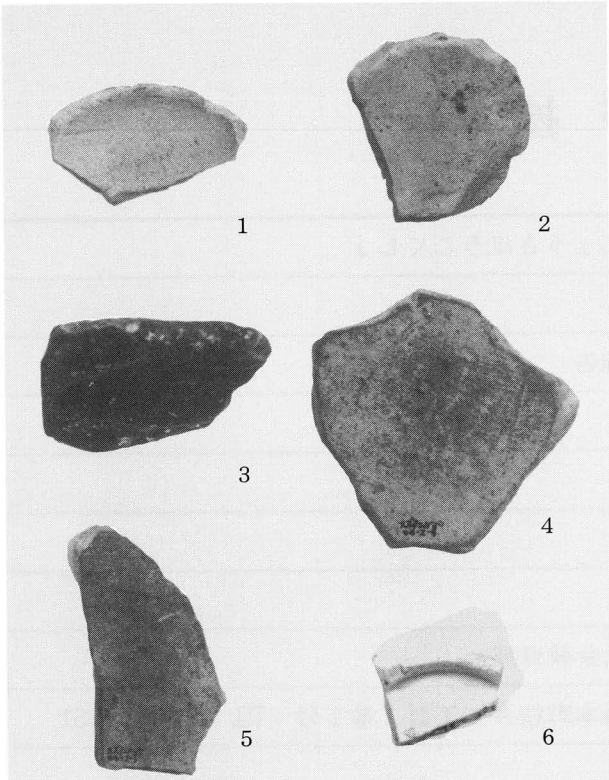
図版4　鈴谷瓦窯跡04－2



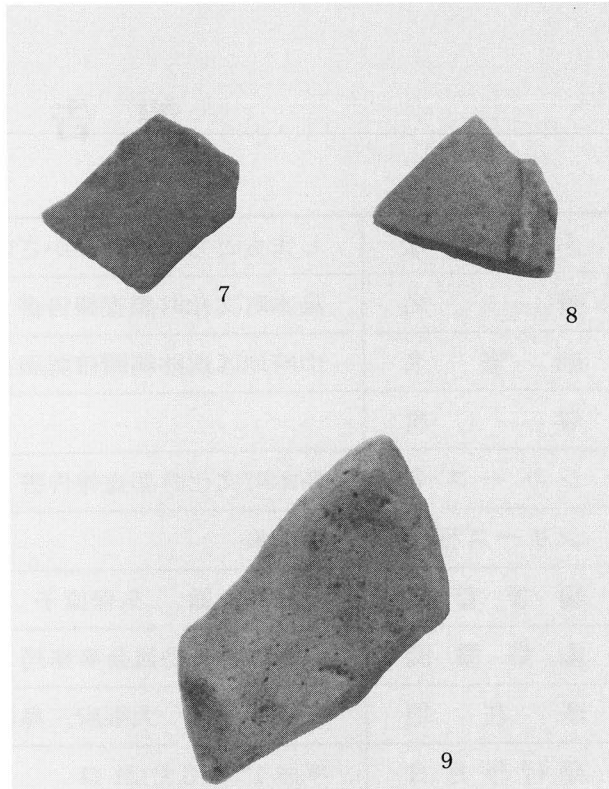
第1Aトレンチ　第2面（北から）

第1Bトレンチ　第2面（北から）

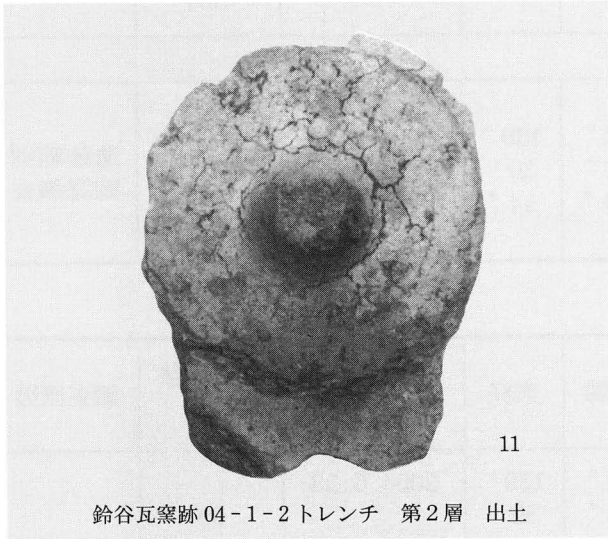
図版5　山崎西遺跡他04-1・鈴谷瓦窯跡04-1・2　出土遺物



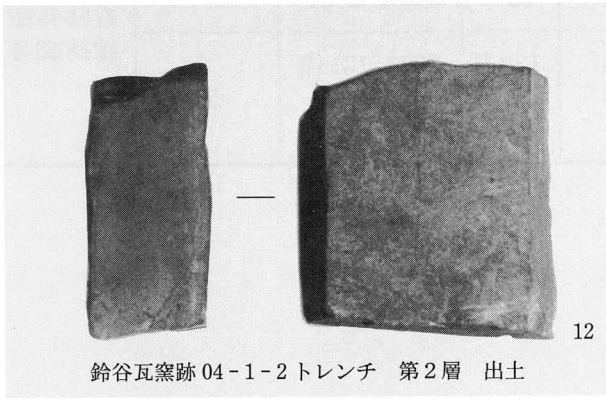
山崎西遺跡他 04-1-1トレンチ　出土
1・2・6．第2b層
鈴谷瓦窯跡 04-1-2トレンチ　出土
3～5．第2層



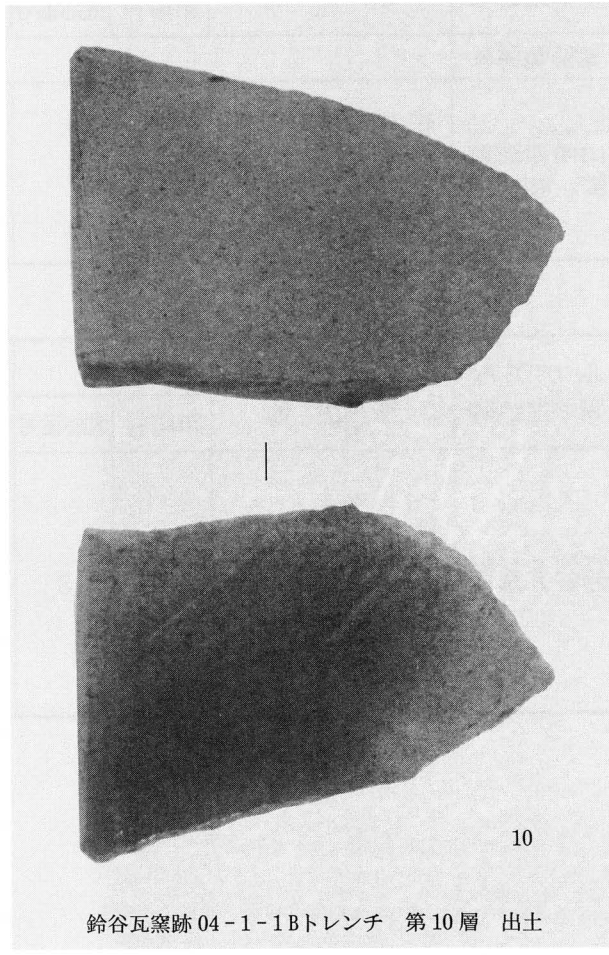
鈴谷瓦窯跡 04-2-1Bトレンチ　出土
7～9．第10層



鈴谷瓦窯跡 04-1-2トレンチ　第2層　出土



鈴谷瓦窯跡 04-1-2トレンチ　第2層　出土



鈴谷瓦窯跡 04-1-1Bトレンチ　第10層　出土

報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	山崎地区遺跡範囲確認調査報告
巻次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第７集
編著者名	松尾洋次郎　久保直子
編集機関	島本町教育委員会事務局　社会教育課
所在地	〒618-8570　大阪府三島郡島本町桜井二丁目１番１号　TEL 075-961-5151
発行年月日	平成17年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
遺跡範囲外								
山崎西遺跡 隣接地	島本町 山崎 四丁目地先	27301		34° 53′ 30″	139° 30′ 14″	2004.6.28 ～ 2004.7.31	40	遺跡範囲 確認調査

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鈴谷瓦窯跡	島本町 山崎 四丁目地先	27301	3	34° 53′ 31″	139° 30′ 12″	2004.6.28 ～ 2004.7.31	60	遺跡範囲 確認調査
				34° 53′ 31″	139° 30′ 12″	2004.12.10 ～ 2004.12.27	56	

島本町文化財調査報告書
第7集

発　行　　島本町教育委員会
〒618-8570　大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号
TEL 075－961－5151
発行日　　平成17年3月31日
印　刷　　野田印刷有限会社
〒618-0013　大阪府三島郡島本町江川二丁目1番16号
TEL 075－961－6460